

平成3年度赤潮貝毒監視事業

播磨灘南部域赤潮調査（抄録）

萩平 将・吉田 正雄・大塚 弘之

本事業は、瀬戸内海関係 12 府県が参加し、赤潮発生予察手法の確立を図るとともに、漁業被害の未然防止と軽減対策の一助を目的として昭和 51 年度より継続中のものである。

平成 3 年度の播磨灘における気象・海象およびプランクトンの出現状況について取りまとめたのでここに報告する。なお、詳細については、平成 3 年度赤潮貝毒監視事業報告書(赤潮調査)を参照されたい。

1 気 象

気温は、8 月上旬～中旬にかけて平年値を下回ったが、他の時期では若干高目から平年並みであった。降水量は、平年より多く、台風の影響を受けた 7 月下旬および 8 月下旬には 100mm / 日以上の大雨がかった。日平均風速は、台風の影響を受けた時期に 5m / sec 以上の風が吹いたが、他の時期では 2m / sec 程度であった。日照時間は、天候が不安定であったため、平年を下回ることが多くかった。

2 海 象

水温成層は、梅雨明け（7 月 19 日）後に表層水温が急上昇したため大きく発達したが、7 月下旬の台風接近で成層は崩れ、その後は成層は安定しなかった。なお、塩分は例年より低かった。表層の栄養塩は、概ね $PO_4\text{-P}$ が $0.10\mu\text{g-at} / \ell$ 以下、 DIN が $1.0\mu\text{g-at} / \ell$ 以下の低濃度で推移した。

3 プランクトン

Chattonella の出現推移は、6 月 17 日に $0.01\text{cells} / \text{ml}$ 検出されたのが最初であり、7 月 25 日に $1\text{cells} / \text{ml}$ 検出され、8 月 2 日に沿岸域で本年度の最高出現数である $15\text{cells} / \text{ml}$ が検出された。その後は減少したが、9 月 5 日まで低密度で検出された。なお、本年度 *Chattonella* が赤潮まで増殖しなかった要因として、増殖を開始した時期に海況が不安定であったこと、栄養塩が枯渇したこと、珪藻類が期間を通して卓越したこと等が大きく影響していたものと推察された。